「震災派遣に思う」

被災地パトロール　男性警察官

被災地をパトロールするパトカー

まだ、冷たい風が吹く中、カツオやサンマの水揚げ漁港で有名な気仙沼漁港に立った私は、あまりの惨状を目の当たりにして言葉も出ず、呆然と立ち尽くしてしまいました。多くの家は流され基礎だけが残り、魚の加工工場は軒並み破壊され、大きな漁船が街中にまで打ち上げられ、車という車は壁に衝突したのかと思うほど潰れ、残った道路も冠水しており、至るところが無惨な姿と化していました。「破壊」という言葉は、まさしくこの惨状のためにあるのかと思うほどだったのです。

今回の東日本大震災は阪神淡路大震災と違い、津波による被害が大きく、多くの人が津波に呑み込まれ、死者は約１５８００人と阪神淡路大震災の約２倍強という未曾有の大災害となりました。また、多くの避難者が出て、特に小さな子供の姿を見るたび心が痛みました。

我々機動パトロール隊の現地での任務は被災地の治安維持でしたが、昼間のパトロールでは被災者が瓦礫の中で行方不明の家族を捜す姿を見るたび、気持ちは落ち込みました。また夜間のパトロールでは、街には灯りはなく真っ暗で、車載ナビに表示される道路や建物はほとんど津波で破壊され、何処を走っているのか迷ったりもし、冠水した悪路と瓦礫の山と漂う異臭で何か不気味な感じさえしました。さらに余震が続いており、また津波が来るのではないかという恐怖心も起こりました。

そんな夜間のパトロール中、漁港の入り江付近を走行していると、車のライトの灯りの中に、一人の老女の姿が浮かび上がったのを見つけたのです。私は「まだまだ寒いこんな夜中に、誰もいないこんな瓦礫の場所で一体何をしているのだろう。まさか自殺でも？」と思い、すぐにパトカーを止めて、その老女にできるだけ穏やかな声で「こんばんは。どうかされましたか。」と質問したところ、その老女は私の声と姿を見て、少しびっくりした様子でしたが、しばらくしてボソッと「娘と孫が津波に浚われて今も見つからない。家のあったこの場所で、娘と孫に早く帰ってこいと呼びかけていたんです。」と話したのでした。私は何と言っていいのか言葉に詰まり、とにかくこのままにしてはおけないので、この老女に「どこに避難されてますか。寒いし真っ暗で危ないからパトカーで送りましょう。」と言いながら、老女を車内に招き入れパトカーで送ることにしたのです。車内では老女は沈黙したままで重ぐるしい雰囲気でしたが、パトカーが避難所前まで着いたときに、老女が頭を下げながら小さな声で「ありがとう。本当は死のうかなと思ってたところでしたが、おまわりさんが声を

かけてくれたことでやめることができました。」と感謝の言葉を残し、避難所に入って行ったのです。私はその言葉を聞き、ホッとすると同時に、この老女だけでなく津波で家族を失い心が傷ついた方は他にもたくさんいることを今更ながら思い知らされ、何となく気分も沈みがちとなったのでした。

しかし、次の当番日の昼間帯に他の避難所に立ち寄ったところ、パトカーの姿を見て「ワァー、パトカーだ」と言いながら集まってくる子供達の元気な笑顔を見たり、多くの避難者の方々から「遠くから来てくれてありがとう。」という感謝の言葉を聞いて、私は「少しはこの派遣で役にたっているんだな」と実感することができ、多くの方々の生き様を感じ、涙してしまいました。

被災者に配布したペーパークラフト

この震災派遣では、私は気仙沼署の方から、同僚が殉職し、自身も被災した状況の中、家族のことは後にして不眠不休で救助活動等を行っていたと言う苦労話を聞くことができました。自分がもし同じ立場に立たされた時に果たして同じような事ができるのかと考えさせられるとともに、日々想定外のことを考えて仕事をすることと、いざという時に安心して仕事ができるように家族に対しては、たとえば将来必ず来るであろう東南海沖地震などに対する備えをさせておくことが大切なのではないかと感じました。

私も派遣回数を重ね、今では派遣先も宮城県から福島県へと変わりましたが、一日も早くあの老女の心が癒えることと気仙沼をはじめとする被災地が復興することを心から願い、派遣が続くかぎり派遣先住民の安全安心のために微力ながら頑張りたいと思っています。